

# ズルナを聴くしあわせ

寺田 吉孝

民博 民族文化研究所

民族音楽学専攻、音楽とアイデンティティの関係について、おもにアジアの事例を中心に調査している。ここ数年は、新しい音楽展示にむけて世界各地のダブリング楽器を集めている。



ズルナを吹くサミール。左腕を少し上にあげて演奏するのは、彼のこだわりのポーズ



サミールから購入したズルナ。来年3月にオープンする新しい音楽展示で紹介する予定

二〇〇六年十一月、私はズルナとよばれる楽器を収集するためにブルガリアに向かった。ズルナは、円錐形の木管に葦から作るリードをつけて演奏する楽器。リードが二重になっているので英語ではダブルリードとよばれ、二枚のリードのあいだに息を吹き込んでリードを振動させて音をだす。西洋のオーボエの原型と考えてよい。

## 皮膚を突き刺す音

ズルナ型の楽器は、日本では珍しいが、ユーラシアを中心として、アフリカ、アメリカの広大な地域で頻繁に演奏されている。そのほっそりした胴からは想像もつかない大きな音がする。しかも皮膚を突き刺すような鋭い音である。ズルナに負けない音量の両面太鼓との組み合わせで演奏されることが多い。ブルガリアでは、タパンという太鼓とセットになっている。結婚式や割礼儀礼、

## 音の世界を自在に飛び回る

サミールの父親で、自身も一世を風靡したズルナ奏者であるデムコの家で落ちあった。音楽研究者夫妻との再会を祝した飲み食い有一段落すると、「そろそろやるか」といった感じでサミールが立ちあがる。家の前に椅子を三つ並べ、サミールを真中にして両脇にもズルナ奏者が座る。この地域では一人のソロ奏者（マイストロ）に対して一〜三人のズルナ奏者が伴奏（グラシュニク）を受けもつ。太鼓奏者は横で立ったまま演

奏する。

サミールの演奏は、すさまじい。言葉にするとあつけないが、他にどのようなように表現したらよいかのかわからない。まったくお手上げである。

初めてサミールを紹介されたとき、私は彼の目の鋭さと凄味に少したじろいだ。その印象は、しかし、彼の音を聞くと妙に納得できるものとなった。私は仕事から優れた演奏家に出会うことも多いが、これほど魂を揺さぶられる音は久しぶりだ。超人的な指さばきもさることながら、延々と続く演奏中、一度たりとも集中力が途切れないのがすばらしい。サミールが演奏するズルナは、彼の



たばこの火で焦げ目をつけるとリードは長持ちする

体の一部となって自由自在に音の世界を飛び回っているようだった。**迫害と厳しい現実を背負って生きる**

ブルガリアにズルナが伝えられたのは一四世紀ごろ。ロマの楽師が伝えたという説が有力だ。ロマは、ジプシーの名称で広く知られる人びとで、北西インドから遅くとも一〇世紀に西に移動しはじめ、数世紀かけてヨーロッパに到達した人びとの末裔であると考えられている。ズルナの起源や伝播の経路には諸説があるが、いずれにせよロマとズルナの付き合いは深く長い。現在でもブルガリアのズルナ奏者は、サミールを含めほぼ全員がロマの出身である。ロマの楽師たちは、楽譜など書かれたものを一切使わない。すべてを聞いて覚えるのだ。「こんな曲もできるんだよ」と言って演奏してくるのは、バッハの管絃楽組曲の一曲。



ほとんどの楽師は副業を持つ。馬の世話は大工の副業である

選曲にも驚かされたが、携帯電話の着メロで覚えたとき聞き再びびっくり。彼らはどんな音楽でもこうやって自分たちの演目にしてしまう。宗教や民族の異なる聴衆の要求にこたえなければならぬ彼らが培った技術である。サミールは私たちが村のはずれにある墓地に連れて行ってくれた。彼の敬愛する叔母がここに眠っているからだ。しかし、墓地に入るとその前方がブルガリア人用で、ロマの人たちの墓は、その先の少し奥まった場所にあった。埋葬される場所も峻別されているのだ。

ロマとして生きる苦しさには触れない。叔母の墓のそばに座り、彼女の激励の言葉が今でも彼を支えていること、演奏に集中すると神とつながっている気がする時があることなどを、演奏の激しさとは対照的な静かな口調で語ってくれた。

ソフィアに戻る前夜、地域の主だったズルナ奏者が酒場に集まってくれた。雇い主や観客のことを考えなくてよい仲間同士の気楽な演奏。だが、和気あいあいとした雰囲気ながらも、ライバルを意識した緊張感がみなぎる。サミールの演奏も、このような優れた演奏家たちとの競争に支えられているに違いない。すばらしいズルナ奏者たちにサステイブ（乾杯）！



取材に同行してくれたロザンカ・ペイチェヴァ(左)とヴェンツィスラフ・ディモフ(右)の夫妻。中央はデムコ